

日本のジオパーク活動における災害情報の保存と活用

Conservation and Utilization of Natural Disaster Information in Geoparks activity of Japan

学籍番号：201421577

氏名：小貫 智晴

Tomoharu ONUKI

日本は様々な災害リスクを抱えている災害大国である。日本は噴火や地震、台風等の災害リスクを抱えており、これまで何度も被害を受けてきた。そのため災害対策は日本の最重要課題である。災害対策において大きな問題となるのは記憶の風化である。地震や噴火は発生に 10 年以上の間隔が開く場合が多く、災害の風化によって同じ被害を繰り返してしまう。災害の風化を防ぐには、何らかの形で災害遺構や災害体験談等の災害情報を収集・保存し、学校や社会教育での災害教育等を通して次世代へ伝承させていく機会を設ける必要がある。

本研究では、災害情報の保存と活用の制度として、地形や地質、地域の文化等を保存し、観光や教育等での活用を図る「ジオパーク」に着目した。先行研究等からジオパークに関連する災害として「火山災害」、「地震災害」、「気象災害」の 3 種類を設定し、火山災害関連ジオパークとして「島原半島ジオパーク」「伊豆大島ジオパーク」、地震災害関連ジオパークとして「山陰海岸ジオパーク」「三陸ジオパーク」、気象災害関連ジオパークとして「白山手取川ジオパーク」「伊豆半島ジオパーク」の 6 カ所を主な研究対象に設定した。研究には主に日本ジオパーク委員会議事録・配布資料、ジオパーク構成自治体の広報誌を用い、各資料の内容分析を行い、ジオパーク活動における火山災害・地震災害・気象災害に関する災害情報の保存と活用が行われているのかを明らかにした。

内容分析の結果、火山災害・地震災害・気象災害のすべてにおいて、災害情報の保存・活用が行われていることが明らかとなった。また日本のジオパーク活動では活動開始当初から様々な災害の情報が保存・活用の対象として考えられていたが、東日本大震災や平成 25 年台風 26 号土砂災害に関して、被災体験談や災害遺構の保存を目的としたジオパークの誕生や災害教育等の増加が見られ、大規模災害の経験によってジオパークにおける災害情報の保存・活用が活性化していることも明らかとなった。これらのことから、ジオパークでは日本の抱える様々な災害リスクに対する災害情報の保存・活用が行われており、防災・減災の向上に有効であると評価できる。

研究指導教員：白井 哲哉

副研究指導教員：吉田 右子